



学校法人
鎌倉女子大学

心^{ありか}の在処について

— プラトン、デカルトを超える学生の直感

ある食事会でのこと、高名なピアニストの方がこう申されました。「主人と長いことロストロポーヴィチと親しくしてきて、彼が家に来たり、私達が彼の家に行ったり。ある時、ロストロがこう言ったのよ…」。

ムスティスラフ・ロストロポーヴィチは、パブロ・カザルスと並び史上最高峰のチェロ奏者です。私も学生時代、バッハの「無伴奏チェロ組曲」のレコードを聴いて、そのゆったりとした音の深みに一瞬にして^{とりこ}虜になったことがありました。他方、それまでのチェロ奏法を画期的に変えたカザルスも忘れがたい音楽家です。^{とう}疾に^{おおやけ}公のコンサート活動からは身を引き、既に伝説的な存在でしたが、ベトナム戦争の終息がまだ見えなかった頃、国連に招かれたことがありました。九十を過ぎた老いた声を鬼気迫るほどに振り絞り、「私の故郷のカタロニアでは鳥たちがこう鳴くのです。“Peace” “Peace” “Peace”」、そう言ってカタロニア民謡の「鳥の歌」を独奏し、世界中の人々を感動させたものです。

長く雪に閉ざされるロシア出身のロストロポーヴィチ、乾いた陽^ひが降り注ぐスペイン出身のカザルス、芸術こそ^{ちよくせつ}直截に人の感性が表れ、人の感性に訴える^{わざ}業からか、優れた芸術ほどむしろ感性を育む風土性が反映されるもので、同じ「無伴奏」でもチェロの^{おんしよく}音色に明らかな違いが出るものです。しかし、間違いなく両巨匠の「チェロ組曲」が万人の心を捉えて止まないのは、彼等の演奏が眼の前の風土を超えて「永遠の相の下に（sub specie aeternitatis [羅語]、under the aspect of eternity [英語]）」直接しているからでしょう。宗教と並び芸術こそ、地と天を行き交う通路なのかも知れません。

夫人のお話に戻しましょう。「ロストロがこう言ったのよ。『ねえ、フミ [夫人の親称]、鎌倉に行って、お地蔵様を見たんだよ。日本のお地蔵様の顔は、みんな優しい笑みを^{なな}湛えている。でも、見てごらんよ、お地蔵様の顔は、雨が降ると、なんと悲しい表情になるのだろう』って」。そして、夫人は、こう続けました。「もののあはれというものかしら…、ロシア人の彼が日本人の心を解^{とく}ってくれているのね」。人の心というものは、異なる文化圏に生まれた人々であろうと、^{たぐいまれ}類稀な才能に恵まれた音楽家であろうと、名も無い路傍の石仏の作家であろうと、全ての相違以前、また相違以上だからなのかも知れません。

これは、ある学生の「建学の精神」のリポートの一節です。「心とは何か、心とはどこにあるのか、きっと疑問がたくさん投げかけられるだろう。大前提として、人間の身体をいくら調べても心という名前の臓器は見つからない。心臓や脳のように形のあるものではなく、

目に見えないものである。私は、『心とは人と人との間に生まれ、存在するもの』だと考えている。人が一人で生きているとき、そこには心があるようで実はまだ完全に生まれていない。誰かと笑い合ったとき、誰かの悲しみに共感したとき、誰かの怒りに胸を痛めたとき。心は自分の中に閉じ込められたものではなく、他者と関わる中で生まれるものである。だから人間は一人では心を持ち続けることができない」。

異なる人々がそれでも解り合える理由は、心の在処というものがこの学生の言う通りだからなのかも知れません。仮に生理学や解剖学や脳科学がこの見解の正否を語ったとしても、その正否以前に、そういう感じ方をしていること自体が素晴らしいこと、その事実がとても尊いことだと思いました。

さて、随分「かも知れません」を繰り返しました。心許ない言い方に聞こえるかも知れませんが、でも、プラトンは、^{ソープロシュネー}「真心」をめぐって議論を交わす『カルミデス』という「対話篇」をこう締めくくっています。真^ま心^{ごころ}の在処は誰にも判^{わか}らない、しかし問い続けることが君に真心^あが在^{あかし}る証^{あかし}なのだよと。デカルトの有名な「我^{われ}思う、故に我在り（cogito ergo sum [羅語]）」も、同じような心の在処の突き止め方と言っていいでしょう。

ただ、ここまで来ると、私は、もう一歩話を進めたくくなります。プラトンやデカルトの言うように、縦^よし問^とい続^つけなければならぬのは確かなことだとしても、どうも彼等は心を個人の持ち物のように考えている節^{ふし}がある。むしろ、心は一人では持ち続けることが出来ない、他者と関わる中で生まれるというこの学生の見ていることは、「識^しは縁^よに因^よって起^おこる」と説いた仏教の「縁起説^{えんぎせつ}」にも通じる、西洋の大哲人たちよりも深いところに触れているのかも知れませんよ。

[>前のページへ戻る](#)